

---

# ポートフォリオ学習における学習者の変容

## —自律した学習者を目指して—

佐 藤 敏 子  
山 名 豊 美  
中 川 武

---

### 1. 大学生の英語力

2002年に文部科学省から「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」が発表され、「国民全体に求められる英語力」「国際社会に活躍する人材等に求められる英語力」という達成目標が設定された。特に後者の「国際社会に活躍する人材等に求められる英語力」では「各大学が、仕事で英語が使える人材を育成する観点から、達成目標を設定」とあり、大学における英語教育の達成目標が「仕事で英語が使える人材の育成」という具体的な内容となった。

英語力に関する社会的要請の高まりの中、各大学で今「英語の授業改革」が進行中であり、「使える英語」に多くの授業が衣替えし始め、以前のような「英・米文学のテキスト」を使用する授業は激減している。一方、一部の大学生の学力低下は受験生の減少とともに、英語指導者の想像をはるかに超えたスピードで進行している。一例として、茨城県下の4年制大学2003年入学生のプレイスメントテストにおける結果を以下に挙げる。(表1)

日本英語検定協会作成の判断基準によると、準2級は「高校中級程度で、『日常生活に必要な平易な英語を理解し、特に口頭で表現でき』」、3級は「中学卒業程度で、『基本的な英語を理解し、特に口頭で表現でき』」、4級は「中学中級程度で、『基礎的な英語を理解し、平易な英語を聞くこと、話すことができ』」、5級は「中学初級程度で、『初歩的な英語を理解し、簡単な英語を聞くこと、話すことができる。』」とある。とすればこの大学の1年生総数206名の中で、高等学校卒業程度の英語力を辛うじて身に付けているのは3名であり、大多数は、中学卒業程度の英語力を習得しないで大学に入学し、さらに206名の半数に迫る81名は「中学校1年程度の英語力である」といわざるを得

表1 英語能力判定テスト(C)(財団法人日本英語検定協会)集計結果

英検相当級	人数
準2級	3
3級	36
4級	86
5級	81

ない。この学生達に、どんな指導法で、どんな教材を使って指導すれば、「仕事で英語が使える人材」になるのだろうか。

## 2. 日本人学習者の問題点

先の文部科学省「『英語が使える日本人』の育成のための戦略構想」に続いて、「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」(2003)が発表された。

- ①総合的なコミュニケーション能力の育成
- ②各学校段階を通した一貫性のある指導
- ③達成目標の設定
- ④英語の授業の改善
- ⑤英語教員の指導力向上および指導体制の充実
- ⑥英語学習のモチベーションの向上

など、平成20年度を目指し、目標実現のための具体的な行動計画が明らかにされた。6項目中、特に注目に値するのが「英語学習のモチベーションの向上」である。①～⑤は指導者の視点に立った指摘であるが、⑥は学習者の視点に立った問題点の指摘であり、従来の英語教育に欠けていた「勉強したい気持ちの喚起」のためにはどんな工夫が必要なのか、という問題提起である。

平尾(2003)は日本の外国語学習者に欠けている点を以下の4点に絞っている。

- ①学習のモチベーション
- ②学習の自律力
- ③到達目標の明示
- ④評価および自己評価活動

学習者の視点に立てば、学習のモチベーションが高ければ、学習の継続も自律も実現でき、到達目標が明確であれば、モチベーションも高くなる。自己評価活動が的確に行われていれば、学習過程および目標設定の修正が自ら行われる。1つだけを取り出して解決することはできない問題で、相互に関わり、4点を視点に入れた授業の改善が必要となり、新しい教授ツールの開発を迫られる。従来の学習方法、すなわち指導者中心の指導方法を、学習者中心の指導法に変え、「教える」のではなく「学ぶ」のであるという学習者の意識改革を図ろうというものである。

## 3. メタ認知とポートフォリオ学習

峯石(2002)は「優れた読み手と劣った読み手の間にはメタ認知的ストラテジーの認識および使用に顕著な相違が見られる」と報告している。メタ認知的ストラテジーの認識・使用とは、学習者が、レフレクション(自分の認知過程を反省する)、モニタリング、コントロールをしながら効果的に学習を進めていく活動である。

平尾(2003)はこの学習過程を取るのが「メタ認識の視点からの外国語学習アプローチ・ポート

フォリオ」として、現在EU各国で使用されている European Language Portfolio を紹介している<sup>10)</sup>。

峯石（2002）はポートフォリオを3種類に分類しているが<sup>11)</sup>、本稿では Assessment Portfolio を使用して、「学習者の英語学習に関する考え方（学習観）の変容」を Horwitz（1987）の BALLI（Beliefs About Language Learning Inventory）を使い、明らかにする。

#### 4. 研究目的

中学生、高校生の英語学習の目的の一つが上級学校入学のためだといわれている。大学生の英語学習に向かう姿勢に問題があるのはその目的がないからということになる。日本で生活する限り、英語を使わなければ支障をきたすような場面に遭遇することもそう度々あるわけでもなく、多くの学生にとっては、必修単位さえ取ればよいというのが現実である。一方、社会的要請は増々強くなり、2002年文部科学省発表の「戦略構想」もこの流れの中で打ち出されたものである。このように極めて曖昧な動機しか持ち合わせていない学生に対して、従来行われてきたテキスト講読の授業では学生たちの興味をつなぐことができない。現在の学習者を取りまく現状に適切に対処し、大学生にふさわしい学力を与えることができる指導法の一つの例として考えられたのが今回のCD-ROMとポートフォリオを利用した授業である。

一般的に高校までの授業で英語を不得意にしてきた学生は、予習や復習をして授業に臨む習慣ができていない。単語や構文などを予め辞書で調べておいて授業で確認する作業ができず、さらには新しい材料を理解し、学習内容を定着させることができない。このような事態を打開し、より効果的な英語学習を進めるために次のような方策をとることにした。

- ①教材は音声と映像が一体化したマルチメディア教材とし、PC を使うことによって学生が必要に応じて反復練習ができるものとする。
- ②授業に対して達成感を持たせるとともに、学習内容の定着を図るためにワークシートを与え、各自のノートを使ってポートフォリオを作成させる。

ワークシートは今回のポートフォリオの主要な構成要素となるものであるが、一義的には時間内に自分がどれだけやったかを客観的に振り返ることを可能にするためのものである。また、授業毎にワークシートを提出させることで、授業中の活動が評価の対象となっていることを自覚させることにも役立つ。PC を用いることで一斉授業に対応できない学習者に対して自律的な学習を促し、さらにポートフォリオを作り達成感を持たせることにより、学習者が従来持っていた英語学習観がこの学習過程の中でどのように変化していくのかを検証することが本研究の目的である。

#### 5. 教材

学習に使用したCD-ROM教材は *The Lost Secret* である。イギリスを舞台に、様々な登場人物が交錯するミステリーである。CD-ROMの詳細な構成については「7. 学習の進め方」で後述する。なお学生にはマイク付きのヘッドホンを別途購入させ、毎回の授業において持参させた。音声の聞

き取りや CD-ROM の視聴はヘッドホンのみでも可能であるが、機能のひとつに「音声認識（7. 学習の進め方 ⑤ Dialog Focus において使用。後述）」があるため、マイク使用の可能なものを持参させ、活用させた。これにより「CD-ROM を見る・聞き取る」「必要に応じてキャプションを表示し、文字で確認する」「ノート作成の際に、重要語句や表現をノートに書き抜き、蓄える」「マイクを用いて発音する」と、ひとつのルーティンの中に多種多様な作業を盛り込むことができた。

## 6. 学習者群

全学習者（茨城県下4年制大学2003年度新入学生）は、大学入学直後（4月）に実施したプレイスメントテストのスコアによって上位群・下位群に分類された。使用したテストは「英語能力判定テスト(C)（財団法人日本英語検定協会が開発した新テスト）」である。試験時間は60分（筆記35分・リスニング25分）である。なお諸外国からの留学生（主として中国および韓国）については、日本人学生とは異なった学習環境のもとに英語学習を行ってきたものと推測されるため、本実験の被験者群には含まないこととし、結果全61名（上位群45名・下位群16名）となった。

## 7. 学習の進め方

上位群では、ノート作成の手順が概ね学習者に浸透するまでの数回は1時限（90分）につき1セッションを、以後は2セッションを進度の目安とした。下位群では、特に学習者に過度の負担を与えないよう十分に配慮し、柔軟性を持たせつつ学習を進めた。いずれのクラスにおいても、個々の学習者が持つ学習ペースを尊重することが確認された。その理由としては CD-ROM 学習の利点のひとつに「学習者の個々の習熟度に応じて学習を進められる」点があり、これを極力阻害しないよう努める必要があったためである。本被験者の多くは、中学・高校での一斉授業において、教師主導型の授業展開についていけない学生であり、その結果徐々に学習意欲そのものを失っていったと推測される。このような状況を大学において再び作り出さないよう、基本的には学習者の習熟度に応じて学習を進めることとし、教師は大まかな進度目標を提示するに留めた。

最初の数回の講義中で CD-ROM の操作方法、ワークシートの使い方およびノート作成の手順を明確に指示し、合わせて1時限の中でどのような時間配分を行ったらいかがを学習者に理解させることを徹底した。具体的には以下のような時間配分がその目安となる（以下は上位群の例）。

- ① PC の準備および設定。ノートの返却。ワークシートの配布。（授業開始～5分）
- ② 前回内容のフォローアップ。内容の確認および重要語句の整理。（5～10分）
- ③ Presentation（10～15分）

Presentation では、その時限で学習するスキット内容を一度通して見ることをその主眼とする。この段階では CD-ROM の設計上、スキット内の語句の意味などを調べる機能にはアクセスができず、またリピート再生機能も使用できない。したがって、学習者が授業開始時において最初に行う活動は、各自で聞き取りや理解ができた部分とそうでない部分とを区別することである。

#### ④ Interactive Listening (15～50分)

Interactive Listening から本格的なノート作成が始まる。Presentation では使用できなかった語句の解説やキャプション（字幕）機能，また単文を繰り返し聞くのに便利なりピート再生などを使いながら，テキスト全体の理解を深めていく。このセクションでは，所々に内容理解を問う質問が出てくるので，学習者は質問に答えながらスキットを見続けることになる。ノートには未知の語句を中心に，内容理解の上で欠かせないと思われるフレーズなどを筆記させる。基本的に細かなノートの様式は問わず，任意の形式でよいこととした。また教員の側から「これだけは押さえておきたい表現」ということでいくつかの単語や熟語を板書し，ノート作成の補助的な情報を提供することにも努めた。また机間巡視を行うことで，質問があればいつでも受けられる体制を作った。合わせてノート作成上のアドバイスも行った。

#### ⑤ Dialog Focus (50～60分)

Dialog Focus では登場人物のセリフ（次にはどんなセリフが入るか）に関して数個の質問が提示される。正解をクリックすれば点数が表示されるが，あえて「音声認識機能」を活用して「実際に発音させる」ことで解答する旨，徹底した（音声による解答の方がより高い得点になるよう設定されている。また誤答したり，正答を得るまでに何度か聞き直しを行うと，その分得点が下がるように工夫されている）。得点はそのつどワークシートに記入させた。

#### ⑥ Dictations および Fill-ins (60～80分)

聞き取りおよび穴埋めの作業である。セクションによって問題数が異なる（10～20問）ので，作業の進捗状況に応じて筆記（Fill-ins には重要語句が集まっているので，必ず全文を筆記）させた。

#### ⑦ まとめ・ノート提出 (80～90分)

ノート作成のスピードには個人差があるので，ノートとワークシートへの記入が完成した学習者から順に提出し，PC の片付けを行うこととした。またこの時間に，個別の質問なども合わせて受けることとした。

全体的な印象では，初回からしばらくは多少の混乱もあったかに見えたが，数回の授業後には，学習者の側にもノート作成や授業全体の手順が浸透したせいか，概ねスムーズに進行した。また1つの大きなエピソードが3～4個の小さなセクションから構成されているので，エピソードが終わる度に内容理解を問う意味での「確認テスト」を実施した。テストの問題は全て上記 CD-ROM 中の「Fill-ins」から出題することとし，テスト前の授業ではあえてノートを回収せず，十分に事前準備をしておくよう指示した。テストを実施した後で，必ず CD-ROM と同内容のビデオを再度一斉に見る機会を設け，内容の定着を図り，理解が不十分なまま以降のエピソードに入ってしまうないように留意した。とりわけ今回使用の教材は非常にストーリー性の高いものであり，細かなプロットや伏線が積み重なって全体を構成しているため，学習者が途中で理解を諦めてしまわないように十分注意をした。結果的には履修を続けた全員が最後までストーリーを楽しめた雰囲気が感じられ，この試みは一応成功したものと思われる。（学習者が作成したノートの一例およびワークシートは資料Aを参照のこと）

## 8. 学習者群の特性

第1回目4月（学期開始時）および第2回目7月（学期終了時）に学習調査（資料B）を実施し、全61名から有効回答を得た（上位群45名・下位群16名）。ここでは特に変容の大きかった回答を中心に分析を行う。個々の質問に対し「その通りです（4）～まったく思わない（1）」の4段階で回答する形式である。なお質問項目中41～48については第2回目調査において新たに加えられたものであるため、別扱いとした。また同中44, 45, 48については複数回答もしくは自由回答が可能であるため、同様に別扱いでの分析を行った。

学習前（4月）の調査回答の結果では、以下の項目で顕著な数値が出ている。肯定的な回答（上位10項目）は以下の通りである。

- 「何度も繰り返し練習するのは大切である。（20：3.71）」
- 「英語を正しい発音で話すことは大切だ。（7：3.62）」
- 「英語学習は難しい。（35：3.49）」
- 「私は英語が上手に話せるようになりたい。（33：3.44）」
- 「英語ができれば良い仕事のチャンスがある。（31：3.39）」
- 「英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。（19：3.18）」
- 「英語は難しい言語だ。（3：3.18）」
- 「カセットテープやCDを使って練習するのは大切である。（26：3.00）」
- 「たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスに従う。（17：2.97）」
- 「外国語を学ぶのは、大人より子供の方が簡単である。（1：2.95）」

また否定的な回答（下位10項目）は

- 「私は英語学習に適した能力を持っている。（16：1.71）」
- 「私が英語学習で進歩がなかったら、先生に責任がある。（23：1.72）」
- 「数学や理科が得意な人は英語の学習は得意ではない。（12：1.89）」
- 「英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。（14：1.89）」
- 「日本人は英語を学ぶのが上手だ。（6：1.98）」
- 「日本人同士で、英語で会話をするのは無駄だ。（39：1.98）」
- 「効果的な授業のためには授業中日本語を使わない方がよい。（11：2.12）」
- 「宿題は必要である。（10：2.16）」
- 「英語の背景にある文化について学びたい。（4：2.21）」
- 「将来英語がうまく話せるようになると思う。（5：2.21）」
- 「自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的ではない。（15：2.21）」

となった。これらの項目を Horwitz (1987) が提示した5つの英語学習者のプロファイリングに基づき分類すると、

- ① Foreign Language Aptitude（言語（ここでは英語）学習に対する適性：さしたる根拠はないが一般的に学習者が英語学習に対して持っているイメージ（自分に適性があるか否かなど）に

関するもの）項目 1, 6, 12, 16, 39

② The Difficulty of Language Learning（英語学習の難しさ）項目 3, 5, 35

③ The Nature of Language Learning（言語学習の特性：英語学習の目的に関するもの）項目 4, 14, 19

④ Learning and Communication Strategies（学習とコミュニケーション方略：Horwitz の解釈に加えて、本研究では新たに「教師に対する学習者のイメージ」を質問項目として加えた）項目 7, 10, 11, 15, 17, 20, 23, 26

⑤ Motivations（学習の動機）項目 31, 33

となった。このことから学習者は、反復練習の重要性（20）、発音の正確さ（7）、学習目的（19）およびその具体的方法（26）に関して認識を持っていることが分かり、さらに英語が上手になりたいという欲求（33, 31）も比較的高いことが明らかとなった。しかしながら、英語そのものに対する難しさや抵抗感のみならず「諦め」にも似た思い（35, 3, 5）、また自身の能力や適性に対しても（さしたる根拠がないまま）極めて否定的、悲観的な見解を持っている（1, 16, 12, 6）こともまた浮き彫りとなっている。英語を学ぶこととその背景にある文化、ひいては自国の文化との関わりについても感覚が希薄であり（14, 4）言語学習の段階で強い抵抗感を感じる余り、さらにその先にある異文化理解のレベルにまでは到底意識が及ばない状況が読み取れる。「授業は教師主導でなされるのが当然である」という学習観（17）に対する支持も多く、学習者自らが主体となって授業を作り上げるという考えはなきに等しいことが分かる。学習開始前の段階で学習者のプロフィールを要約すると、「英語を正しい発音で上手に話せるようになればいいと思う。そのためには繰り返し練習し、単語や熟語を覚え、時には先生のアドバイスを従う必要があることは理解できる。しかしながら日本人であり、既に大人になった自分にとっては（子供時代に比べると）学習が難しく感じられ、また元々その能力があるとも思えない。英語圏の文化について学ぶ必要性もさほど感じられず、将来英語がうまくなるとも思えない」となる。

## 9. 学習後の調査回答分析に見る学習者の変容

### (a) 全体

全学習者の回答中とりわけ学習前、学習後で変容の大きかった項目（以下は質問項目番号を示す。カッコ内+は「その通りです」と回答した割合が増えたことを示し、-は「まったく思わない」と回答した割合が増えたことを示す。詳しくは表2を参照）を列举すると、14（+0.34）、3（-0.34）、29/35（-0.3）、26（+0.26）、13（+0.2）、4（+0.18）、17/37（-0.17）、19/23（-0.15）、39（+0.15）、8（+0.14）などである。（全項目のプレおよびポストの結果については図1、資料Cを参照のこと）

「英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。（14）」では学習者が外国語を学ぶことで自国の文化に対してもそれまで以上の興味や関心を持てうることを意識し始めたものと推察でき、その一方で「英語は難しい言語だ。（3）」「英語学習は難しい。（35）」といったこれまで

表2 学習調査結果 (学習終了後)

全体 t検定(p=0.524)	肯定から否定						否定から肯定					
	順位	項目番号	プレ	ポスト	差	p	順位	項目番号	プレ	ポスト	差	p
	1	3	3.18	2.84	-0.34	0.036	1	14	1.89	2.23	0.34	0.053
	2	29	2.61	2.31	-0.3	0.038	2	26	3	3.26	0.26	0.027
	2	35	3.49	3.19	-0.3	0.028	3	13	2.59	2.79	0.2	0.023
	4	17	2.97	2.8	-0.17	0.018	4	4	2.21	2.39	0.18	0.025
	4	37	2.38	2.21	-0.17	0.023	5	39	1.98	2.13	0.15	0.023
	6	19	3.18	3.03	-0.15	0.015	6	8	2.56	2.7	0.14	0.018
	6	23	1.72	1.57	-0.15	0.028	7	6	1.98	2.1	0.12	0.018
	8	10	2.16	2.03	-0.13	0.02	7	24	2.36	2.48	0.12	0.015
	9	38	2.41	2.31	-0.1	0.013	9	25	2.28	2.38	0.1	0.013
	10	1	2.95	2.87	-0.08	0.009	10	15	2.21	2.3	0.09	0.012
	10	18	2.77	2.69	-0.08	0.01						
上位群 t検定(p=0.739)	順位	項目番号	プレ	ポスト	差	p	順位	項目番号	プレ	ポスト	差	p
	1	3	3.18	2.73	-0.45	0.048	1	8	2.44	2.8	0.36	0.043
	2	35	3.44	3.11	-0.33	0.032	2	14	1.91	2.22	0.31	0.048
	3	29	2.58	2.29	-0.29	0.038	3	13	2.56	2.8	0.24	0.029
	4	17	3	2.76	-0.24	0.027	3	32	2.6	2.84	0.24	0.029
	5	33	3.53	3.33	-0.2	0.019	3	26	3.07	3.31	0.24	0.024
	6	19	3.18	3	-0.18	0.018	6	4	2.2	2.42	0.22	0.031
	7	10	2.2	2.04	-0.16	0.023	7	39	1.93	2.09	0.16	0.025
	7	1	2.98	2.82	-0.16	0.017	8	15	2.13	2.27	0.14	0.019
	9	23	1.62	1.47	-0.15	0.032	9	24	2.31	2.42	0.11	0.015
	9	27	2.42	2.27	-0.15	0.021	9	25	2.18	2.29	0.11	0.016
							9	34	2.78	2.89	0.11	0.012
下位群 t検定(p=0.496)	順位	項目番号	プレ	ポスト	差	p	順位	項目番号	プレ	ポスト	差	p
	1	32	3.38	2.5	-0.88	0.094	1	27	2.5	3.13	0.63	0.07
	2	8	2.88	2.44	-0.44	0.052	2	14	1.81	2.25	0.44	0.068
	3	12	2.44	2.06	-0.38	0.053	3	26	2.81	3.13	0.32	0.033
	3	30	3.19	2.81	-0.38	0.04	4	20	3.63	3.94	0.31	0.026
	3	37	2.69	2.31	-0.38	0.048	4	33	3.19	3.5	0.31	0.03
	6	29	2.69	2.38	-0.31	0.039	6	6	1.94	2.19	0.25	0.039
	6	40	2.75	2.44	-0.31	0.038	6	36	2.75	3	0.25	0.028
	8	22	2.94	2.69	-0.25	0.028	8	2	2.25	2.44	0.19	0.025
	9	28	2.75	2.56	-0.19	0.022	9	21	2.75	2.88	0.13	0.014
	9	31	3.5	3.31	-0.19	0.018	9	24	2.5	2.63	0.13	0.016
	9	35	3.63	3.44	-0.19	0.017						

の思い込みを払拭し始めるというプラスの効果も生まれている。「教科書がないと英語は勉強できない。(29)」「カセットテープや CD を使って練習するのは大切である。(26)」の項目では、それまで学習者が受けてきた「教科書 (=訳読)」を中心とした学習を超えた、新たな学習形態に対する意識が根付きつつあることを思わせる。「英語の勉強はアメリカやイギリスなどで勉強するのがよい。(13)」「英語の背景にある文化について学びたい。(4)」「英語を話すのには英語圏の文化を知る必要がある。(8)」など、日本国内での学習から英語圏での学習、また生活文化一般に関する関心が高まり「教室という学習環境に限定されない、より生活に密着したレベルでコミュニケーションツールとしての英語を学びたい」という意欲が新たに芽生えつつあることも見逃せない。このことは、

言語と文化は互いに密接に関わっており、どちらが欠けても異文化理解が成立しえないことを、学習者自身が気づき始めたものと高く評価できる。また「たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスを従う。(17)」「日本人の先生より、外国人に英語は習いたい。(37)」「英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。(19)」「私が英語学習で進歩がなかったら、先生に責任がある。(23)」では、従来の“teacher-centered”な学習に対する新たな提案と解釈できる。これまで学習者の大部分は、教師に言われるがままに課題をこなし、単語や熟語を暗記した。またそれが英語学習の根幹であり、教師の視点に立った方法こそが効果的な学習方法であると信じてきた。しかしながら本論で述べられる授業形態では、学習者が学習進度を選択し、不明な点は何度も聞き返しを行いながらノートを作成していくという“learner-centered”な展開如何に負う部分が大きい。学習者自身がよかれと選択した方法であれば、ある程度までは任意の裁量でやってみればよいのであって、不本意ながら先生のアドバイスを従う必要はない（＝学習者の視点が中心になる）ということである。このことは学習者自身に新たな責任と義務を与える。つまり「英語教師が日本人か外国人かというのは論点ではなく、いずれの場合も学習の主導権は常に学習者自身にある」ということ、ただし「その成果については教師ではなく、学習方法を選択した学習者自身にはね返る」ということである。このことは、学習における教師の役割自体に大きな影響を与える。つまり、それまでのようにいわゆる線引きを行い学習者を一気呵成に導いていくというよりも、むしろよきアドバイザーとして個々の自立学習を支援するといった、全く異なる役割が求められる。勿論これには個々の学習者の個性を入念に把握し、それぞれの事象に対応できるだけの柔軟性が必要であり、同時に丹念なフォローアップなどの手間も必要とする。

学習終了後の学習者のプロフィールを要約すると、「英語を難しいと構える必要はない。英語を学ぶことはその国の文化、ひいては自国の文化を知るきっかけにもなる。また学習の方法は教科書に頼らずとも可能であり、カセットテープやCDなど様々な手段を活用することもできる。教師のアドバイスに強制される必要はなく、自身のやり方を原則とすればよい。ただし、進歩が感じられない場合は、外的要因（＝例えば教師の指導方法や教材の選定）のみならず内的要因（＝学習者自身の学習戦略の選択や見直しなど）を検討することが必要である」となる。

#### (b) 上位群と下位群に見られる傾向

上位群に特異の傾向が見られた質問項目は 3（-0.45）、8（+0.36）、17（-0.24）、13（+0.24）、32（+0.24）、4（+0.22）、33（-0.2）、19（-0.18）、39（+0.16）、10（-0.16）、1（-0.16）、23/27（-0.15）、15（+0.14）、25/34（+0.11）となった。下位群に特異の傾向が見られた質問項目は 32（-0.88）、27（+0.63）、8（-0.44）、12/30/37（-0.38）、20/33（+0.31）、40（-0.31）、6/36（+0.25）、22（-0.25）、2（+0.19）、28/31（-0.19）、21（+0.13）となった。とりわけ以下の項目では、上位群と下位群で相反した結果が出ている。

○「外国語ができる人は頭が良い。(32：上位群 +0.24, 下位群 -0.88)」

○「英語を話すのには英語圏の文化を知る必要がある。(8：+0.36, -0.44)」

○「外国語を学ぶということは他の学問を学ぶこととは異なる。(27：-0.15, +0.63)」

○「私は英語が上手に話せるようになりたい。(33: -0.2, +0.31)」

この結果の差が学習者のどのような要因で生じるかを判断するのは、今後の研究を待ちたい。

## 10. PC を用いた学習についての項目

第2回目調査において新たに追加された、PC を用いた学習に関する質問(41~48)からは、学習者が上位群、下位群のいずれにおいても非常に高い満足度を得たことがわかる。

○「コンピュータを使った英語学習は楽しい。(41: 3.39 (全体) 3.47 (上位群) 3.19 (下位群, 以下同))」

○「コンピュータを使った英語学習は効果的である。(42: 3.18, 3.27, 2.94)」

○「学習記録(ノート)作成は効果的な学習方法である。(43: 3.28, 3.36, 3.06)」

○「この授業は熱心に参加している。(46: 3.52, 3.58, 3.38)」

○「先生の指導は適切である。(47: 3.44, 3.44, 3.44)」

と、ほぼ全ての項目で4段階の3(そう思うことがある)以上の肯定的な回答を得た。出席率の低下や、学習に対する動機付けが難しくなりつつある大学英語教育の現状に対して、PC を用いた学習により何らかの提起が可能に思われる結果である。つまり、毎回の授業における到達目標が明確であり、ノートを作成し提出するというノルマを達成すべく個々の学習者が熱心に授業に参加したことのひとつの成果といえよう。今回使用したマルチメディア教材はCD-ROM を使っているが、その最大の特徴は、ハードディスク内に音声認識プログラムを組み込み、学習者が実際に発声した英語を評価できることである。PC の性能が向上したことにより、操作が面倒だったり、反応が遅かったりする問題はほとんど見られず、充分実用レベルに達しているという印象を持った。90分の授業の中で60~70分をPC を使った演習にあて、残りをワークシートでの作業にあてるといった計画をたてることによって、集中力を維持できることもわかった。

## 11. まとめと今後への課題

本授業案の柱として、CD-ROM 教材による個人学習を可能にし、さらに学習後の達成感を持たせる方法としてポートフォリオを導入することにした。ここで作られるポートフォリオは言うまでもなく学習者が何を学んだかを記録するためのポートフォリオであり、授業時間内で作成できることを前提とした。手順としては、ポートフォリオの骨格をなすものとして、毎時間ワークシートを与え、その中にその日の活動を記録できるようにした。学習者は授業毎にワークシートを提出し、次の時間の最初に返却されたものをノートに張ることでポートフォリオを作成していく。また、ワークシートに書ききれないものはノートの空白部分の書くことにし、余力があれば、家で辞書などを使って調べたものを記入することにした。最初はただ教師に言われるがままワークシートを貼り付けていただけであったが、多くの学習者が次第により充実したポートフォリオを作ろうと意欲的に取り組むことができた。また提出を義務付けることによって必然的に綺麗なノートを作らざるを

得ず、結果的に、テスト前に学習者自身が復習する際にも見やすく役だっていたようだ。

これまでの分析で明らかなように、PC とポートフォリオを組み合わせた指導法が自律的な学習を促進することができるということが分かった。一般教室を使わざるを得なかったり、各自で用意したヘッドホンマイクの性能がそれほど高いものでないなど多くの制約があったにもかかわらず学習者の授業に対する参加意欲を高めることができたということは、条件を整えていけば、一層の効果が期待できるということでもある。一斉授業ではただ座っているだけの学生がキーボードを操作し、画面に出てくる問題に取り組む様子は、英語学習の新たな可能性を感じさせるものである。外国語学習の原点が外国文化に対する興味であるとするならば、現地で作られたドラマを基にした教材は学習意欲を呼び起こすのに正にうってつけの教材ともいえる。このように学習意欲を引き起こす上では大きな効果を上げたポートフォリオ学習ではあるが、学習効果という視点からは不満足な点も多い。自由に繰り返すことができるにもかかわらず文法項目などの習得では従来の一斉授業に比べてもあまり大きな成果が得られなかった。

今回の取り組みの中で我々は基礎学力の定着を図るためにユニット毎に Fill-ins から10問ほどを選んでどのくらい記憶しているかを小テストの形で確認してみた。その結果分かったことは、文法項目の理解や定着に関していえば、PC による演習もそれ程大きな成果を残さないということである。言い換えるならば、基礎学力を付けるためには CD-ROM 教材と組み合わせて、従来どおり口頭練習や筆記訓練の機会を確保する必要があるということである。

PC による演習が基礎学力の定着に結びつかなかった理由はいくつか考えられるが、ひとつには日本語によるサポートが字幕の形でいつでも使える状態にあるために、学習者がそれに頼る傾向が見られたことがある。これについては教材をインストールする際に日本語の表示をしないようにすることもできるので、どちらの学習効果が高いのかを比較する必要がある。もうひとつの理由としては、文法項目の復習の場である Fill-ins の演習では解答が4肢選択の形で与えられ、よく理解していなくても正解できてしまうということがあった。また、正答や誤答に対しての解説はなく、その点でも理解を助ける手段が不足しているように思われる。いずれにせよ、授業の全てを PC に任せられるわけではなく指導者の工夫が必要なのは言うまでもない。

いくつかの欠点はあるにせよ、PC を利用した授業は一斉授業では対応できない様々なレベルの学習者に対して学習意欲を高め、自律的な学習を促す点で大きな可能性を持っていることは事実である。これが発展するか否かは今後の教材開発にかかっている。現場で実際に使った者の声をなるべく多く活かした教材が近い将来出てくることを願ってやまない。

（さとう・としこ 産業情報学科）

（やまな・とよみ 社会福祉学科）

（ながかわ・たけし 産業情報学科）

## 注

(1) EU の多様な言語使用の中で、外国語習得の必要性が高まり、その学習方法として The Council

of Europe が提唱・実践している指導・学習法であり、ここではポートフォリオを次のように定義している。

- ① an open-ended record of a pupil's achievements in languages (学習者が作成)
- ② a document which can be kept by the teacher on behalf of the pupil (指導者が作成・保管)
- ③ a valuable source of information to aid transfer to the next class or school (クラスや学校が変わったときの学習者の情報提供)

特にこのポートフォリオ学習の目的としては、次の2点を挙げている。

- (1)学習者のモチベーションの向上
- (2)学習記録の作成・提供

平尾(2003)はこの European Language Portfolio が ①学習歴、学習環境、学習体験、学習方略をリフレクトし ②自ら考え、自ら学ぶ自律学習を目指し ③“I can do”方式による自己評価をし ④学習者の学ぶ意欲を喚起する、日本の外国語学習者にとって有効な学習方法となりうると主張している。

(2)峯石(2002)の分類によれば ① Working (Process) Portfolio ② Display (Showcase, Best Works) Portfolio ③ Assessment Portfolio の3種類である。ここではその一つ一つの解説は省くが、本稿で採用するポートフォリオの機能は「そのカリキュラムにおいて学習者が何を学んだか」を記録することである。

## 参考文献

- Benati, A. 2001. “A Comparative Study of the Effects of Processing Instruction and Output-based Instruction on the Acquisition of the Italian future tense” *Language Teaching Research* 5.2, pp95-127.
- Clark, E.V. 1993. *The Lexicon in Acquisition*, Cambridge University Press.
- Council of Europe 2001 *Common European Framework of Reference for Languages*  
URL: <http://www.coe.int/>
- Educational Testing Service 1999. *TOEFL Test and Score Data Summary 1999-00 Edition*, ETS.
- 平尾節子 2003. 「ヨーロッパ言語ポートフォリオ活用のアプローチ」外国語教育メディア学会第43回全国研究大会.
- Horwitz, E. K. 1987 “Surveying Student Beliefs About Language Learning” *Learner Strategies in Language Learning*, Prentice Hall.
- 伊村元道 2000. 「逆風の中、今こそむしろ英文法」『英語教育』vol. 49, no. 2, 8-9.
- JACET (大学英語教育学会) SLA 研究会 2000『SLA 研究と外国語教育』リーベル出版.
- ジャン-フランソワ・ルニ (寺内礼 監訳) 1992『認知科学と言語理解』頸草書房.
- 神本忠光 1998. 「大学での『やり直しの英文法の授業』における文法項目配列例— -ing 形と -ed 形を中心に—」熊本学園大学文学・言語学論集第5巻第1号 93-111.
- 加藤幸次 2001. 『総合学習に活かすポートフォリオ評価の実践』金子書房.

- 清川英男 1990.『英語教育研究入門』大修館書店.
- 小池生夫監修 1994.『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』大修館書店.
- 小寺茂明 1990.『英語の指導と文法研究』大修館書店.
- Krashen, S. D. and Terrell T. D. 1983. *The Natural Approach: Language Acquisition in the Classroom*, Alemany Press. 藤森和子（訳）1986『ナチュラル・アプローチのすすめ』大修館書店.
- 久保田章 1989.「英語の複合構文習得上の困難点」『昭和63年度筑波大学学内プロジェクト研究報告書』7-28.
- 峯石緑 2002.『大学教育における教授手段としてのポートフォリオに関する研究』溪水社.
- Larsen-Freeman, D. and Long, M. H. 1991. *An Introduction to Second Language Acquisition Research*, Longman.
- 望月昭彦編著 2001.『新学習指導要領にもとづく英語科教育法』大修館書店.
- 文部科学省 2002.「『英語が使える日本人』の育成のための戦力構想」
- 2003.「『英語が使える日本人』の育成のための行動計画」
- 村川雅弘 2001.「『生きる力』を育むポートフォリオ評価」ぎょうせい.
- Murphy, R. 1990. *Essential Grammar in Use*, Cambridge University Press.
- 大友賢二 1996.『項目応答理論入門』大修館書店.
- 岡田伸夫 1999.「英語力の低下と文法力—文法のおもしろさを学生に知ってもらうために—」『英語教育』vol.48, no.7, 17-19.
- 佐藤敏子・中川武・岡田あずさ 2001.「効果的な英語学習指導に向けて—学習者の文法運用力調査—」『つくば国際大学研究紀要』vol.7, 47-66.
- 佐藤敏子・中村典生 1997.「つくば国際大学生の英語聴解力調査—JACET 基礎聴解力標準テストを使ったデータ分析—」『つくば国際大学研究紀要』vol.3, 93-106.
- 佐藤敏子・中村典生 1998.「Shadowing の効果と学習者の意識」『つくば国際大学研究紀要』vol.4, 47-57.
- 佐藤敏子・中村典生 1999.「リスニングの指導法とその効果的な学習環境」『つくば国際大学研究紀要』vol.5, 15-28.
- 佐藤敏子・中村典生 2000.「英語聴解力と文法運用力」『つくば国際大学研究紀要』vol.6, 55-65.
- 佐藤敏子・山名豊美・中川武・岡田あずさ 2002.「文法運用力とその効果的な指導法」『つくば国際大学研究紀要』vol.8, 1-21.
- 佐藤敏子・中川武・山名豊美 2003.「習熟度別クラス編成とプレイスメントテスト」『つくば国際大学研究紀要』vol.9, 11-22.
- 高梨庸雄 1995.「なぜ文法が「悪者」になるのか」『英語教育』vol.43, no.13, 11-13.
- 高浦勝義 2000.『ポートフォリオ評価法入門』明治図書.
- 田辺洋二 1995.「学校文法の行方」『英語教育』vol.43, no.13, 8-10.
- 田中敏・山際勇一郎 1994.『ユーザーのための教育・心理統計と実験計画法』教育出版.

田崎清忠 1995.『現代英語教育法総覧』大修館書店.

Ur, P. 1984. *Teaching Listening Comprehension*, Cambridge University Press.

VanPatten, B. 1990. "Attending to Form and Content in the Input", *SSLA 12*, pp287-301.

White, V. W. 1988. *The ELT Curriculum*, BLACKWELL.

山本涼一 2003.「テクノロジーを活用した認知アプローチ」外国語教育メディア学会第43回全国研究大会.

柳原由美子 1995.「シャドウイングとディクテーションの効果について」*Language Laboratory*, vol. 32, 73-90.

余田義彦 2001.『「生きる力」を育てるデジタルポートフォリオ学習と評価』高陵社書店.  
英語能力判定テスト (C) 財団法人日本英語検定協会

資料A ノート・ワークシート実例

**WORKSHEET**    DATE 7 / 19

名前 \_\_\_\_\_ 学籍番号 031

・ このシートは毎回授業終了後に担当教員に提出すること。

**THE LOST SECRET**    (2003年度前期)

Episode 7

(1) Presentation (一回通してみる) / A page is missing.  
今日のセクション名 Well, what did you find out?

(2) Interactive Listening / A page is missing.  
今日のセクション名 Well, what did you find out?

1. 理解度テストの正解率 100 %

2. 作業手順 (「テキスト表示」, または abc クリック)

(a) 知らない単語・熟語の抜き書き

(b) 辞書で調べる

(3) Dialog Focus    A page is missing  
今日のセクション名 What did you find out?  
録音解答得点 98 / 138 点

(4) Fill-ins (ノートに英語を写す)  
・ 気をつけて覚えたい英単語を下に書き写す。

—

<Interactive Listening>

<ul style="list-style-type: none"> <li>● find out (分かった)</li> <li>● ~ can wait (待て...)</li> <li>● that's no problem (問題ない)</li> <li>● Not for me (私には...)</li> <li>● more ~ than you do (あなたより...)</li> <li>● didn't work (効かなかった)</li> <li>● somewhere near the end (最後の方)</li> <li>● That's why (だから)</li> <li>● give ~ back (返す)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>● excellent (素晴らしい)</li> <li>● believe (信じる)</li> <li>● dead → Alive (死んだ → 生き返る)</li> <li>● Get me (私に...)</li> <li>● lost/secret (失われた記憶)</li> <li>● missing (欠けた...)</li> <li>● stole → took (盗む)</li> <li>● interested (興味がある)</li> </ul>
--	--

<Fill-ins>

⑮ Did you go to the library, or didn't you?

⑯ What are you talking about?

⑰ Excellent. Very interesting.

\* ⑱ When I tell you something, you should believe me. (私が言うのは真実だ)

⑲ I know more about these things than you do. (〜より)

⑳ Sabina doesn't look very interested (in) mine. (興味を持っていない)

㉑ Before you say anything more, remember. (それ以上言う前に)

㉒ But you said he was dead.

㉓ Perhaps you should listen to me sometimes, Basil? (時には〜聞け!)

㉔ I have to think about this. (それは考えなければならない)

㉕ What does he say about this symbol? (最後の方について)

\* ㉖ It's somewhere near the end, I think. (そこ)

㉗ A page is missing from the book. (欠けた)

㉘ How did you get the book? I took it. (盗った)

(抄)

① 前回の授業で、中川さんと山名さんが...

② 疑問文の作り方

③ ~ する こと

④ 疑問詞の使い方

## 資料B

### 学習調査

1. 名前 \_\_\_\_\_ 学籍番号 \_\_\_\_\_

2. 出身高校 \_\_\_\_\_ 高等学校（私・公）立（○をつけてください）

コンピュータを使った英語学習が終わります。きっと今までの「英語の勉強」とは違う新しい体験だったと思います。「英語の勉強」について、今までとは違う「感想」や「考え」をあなたは今持っているのではないのでしょうか。そのことを聞きますので、教えてください。

1—まったく思わない 2—あまり思わない 3—そう思うことがある 4—その通りです

- |   |                  |
|---|------------------|
| (1) 外国語を学ぶのは、大人より子供の方が簡単である。                | 1----2----3----4 |
| (2) 外国語を学ぶのに特別な才能を持っている人がいる。                | 1----2----3----4 |
| (3) 英語は難しい言語だ。                              | 1----2----3----4 |
| (4) 英語の背景にある文化について学びたい。                     | 1----2----3----4 |
| (5) 将来英語がうまく話せるようになると思う。                    | 1----2----3----4 |
| (6) 日本人は英語を学ぶのが上手だ。                         | 1----2----3----4 |
| (7) 英語を正しい発音で話すことは大切だ。                      | 1----2----3----4 |
| (8) 英語を話すには英語圏の文化を知る必要がある。                  | 1----2----3----4 |
| (9) 最も効果的な学習方法は先生がよく知っている。                  | 1----2----3----4 |
| (10) 宿題は必要である。                              | 1----2----3----4 |
| (11) 効果的な授業のためには授業中日本語を使わない方がよい。            | 1----2----3----4 |
| (12) 数学や理科が得意な人は英語の学習は得意ではない。               | 1----2----3----4 |
| (13) 英語の勉強はアメリカやイギリスなどで勉強するのがよい。            | 1----2----3----4 |
| (14) 英語を勉強すると、日本の文化もよく理解できるようになる。           | 1----2----3----4 |
| (15) 自分達でその日の学習内容を決めるのは、効果的ではない。            | 1----2----3----4 |
| (16) 私は英語学習に適した能力を持っている。                    | 1----2----3----4 |
| (17) たとえ自分のやり方とは違っていても先生のアドバイスに従う。          | 1----2----3----4 |
| (18) 指導者がいないと、英語の学習はできない。                   | 1----2----3----4 |
| (19) 英語の学習で最も重要なのは、単語・熟語を覚えることである。          | 1----2----3----4 |
| (20) 何度も繰り返し練習するのは大切である。                    | 1----2----3----4 |
| (21) 授業を管理するのは、先生である。                       | 1----2----3----4 |
| (22) 英語の学習で最も重要なのは、文法である。                   | 1----2----3----4 |
| (23) 私が英語学習で進歩がなかったら、先生に責任がある。              | 1----2----3----4 |
| (24) 学生の評価は先生によってされるべきである。                  | 1----2----3----4 |
| (25) 英語は、読んだり、聞いたりするよりも、話すことの方が簡単である。       | 1----2----3----4 |
| (26) カセットテープや CD を使って練習するのは大切である。           | 1----2----3----4 |
| (27) 外国語を学ぶと言うことは他の学問を学ぶこととは異なる。            | 1----2----3----4 |
| (28) 英語学習で最も重要なのは、日本語から英文に翻訳する仕方を学習することである。 | 1----2----3----4 |
| (29) 教科書がないと英語は勉強できない。                      | 1----2----3----4 |
| (30) 英語を学ぶときは、外国人に習うのが一番良い。                 | 1----2----3----4 |
| (31) 英語ができれば良い仕事のチャンスがある。                   | 1----2----3----4 |

- (32) 外国語ができる人は頭が良い。 1----2----3----4
- (33) 私は英語が上手に話せるようになりたい。 1----2----3----4
- (34) 私は外国人と友達になりたい。 1----2----3----4
- (35) 英語学習は難しい。 1----2----3----4
- (36) 誰でも英語は話せるようになる。 1----2----3----4
- (37) 日本人の先生より、外国人に英語は習いたい。 1----2----3----4
- (38) 英語は話したり聞いたりするより、読んだり書いたりする方がやさしい。 1----2----3----4
- (39) 日本人同士で、英語で会話するのは無駄だ。 1----2----3----4
- (40) 授業中の活動は、クラスがみな同じ活動をする方がよい。 1----2----3----4
- (41) コンピュータを使った英語学習は楽しい。 1----2----3----4
- (42) コンピュータを使った英語学習は効果的である。 1----2----3----4
- (43) 学習記録（ノート）作成は効果的な学習方法である。 1----2----3----4
- (44) 一番学習効果が上がるのはどこですか。
1. Presentation 2. Interactive Listening 3. Dialog Focus 4. Fill-Ins
- (45) この授業で「実力向上」を実感するのは次のどれですか。（いくつでも）
1. 聞く力 2. 話す力 3. 読む力 4. 書く力
5. 語彙力(単語力) 6. 発音 7. 文法力 8. 辞書の使い方
- (46) この授業は熱心に参加している。 1----2----3----4
- (47) 先生の指導は適切である。 1----2----3----4
- (48) この授業について今感じていることを書きなさい。（詳しく）

## 資料C

全体 t検定(p=0.524)	項目番号	プレ	ポスト	差	項目番号	プレ	ポスト	差
	1	2.95	2.87	-0.08	24	2.36	2.48	0.12
	2	2.34	2.39	0.05	25	2.28	2.38	0.1
	3	3.18	2.84	-0.34	26	3	3.26	0.26
	4	2.21	2.39	0.18	27	2.44	2.49	0.05
	5	2.21	2.18	-0.03	28	2.56	2.51	-0.05
	6	1.98	2.1	0.12	29	2.61	2.31	-0.3
	7	3.62	3.56	-0.06	30	2.87	2.8	-0.07
	8	2.56	2.7	0.14	31	3.39	3.34	-0.05
	9	2.69	2.64	-0.05	32	2.8	2.75	-0.05
	10	2.16	2.03	-0.13	33	3.44	3.38	-0.06
	11	2.12	2.12	0	34	2.84	2.89	0.05
	12	1.89	1.84	-0.05	35	3.49	3.19	-0.3
	13	2.59	2.79	0.2	36	2.9	2.87	-0.03
	14	1.89	2.23	0.34	37	2.38	2.21	-0.17
	15	2.21	2.3	0.09	38	2.41	2.31	-0.1
	16	1.71	1.79	0.08	39	1.98	2.13	0.15
	17	2.97	2.8	-0.17	40	2.61	2.54	-0.07
	18	2.77	2.69	-0.08	41	なし	3.39	3.39
	19	3.18	3.03	-0.15	42	なし	3.18	3.18
	20	3.71	3.75	0.04	43	なし	3.28	3.28
	21	2.84	2.87	0.03	46	なし	3.52	3.52
	22	2.84	2.77	-0.07	47	なし	3.44	3.44
	23	1.72	1.57	-0.15				

\*項目44・45・48は自由回答式であるため省略

## Portfolio-Based Language Learning: How Do the Learners Modify Their Attitudes?

Toshiko Sato, Toyomi Yamana and Takeshi Nakagawa

This paper discusses how Portfolio and CALL (Computer Assisted Language Learning) will impact on the students' learning process and attitude. In this context, the term "Portfolio" refers to all kinds of resources and works which students undertake throughout the classroom activities (such as note-taking and filling-in worksheets). Research was conducted twice (at the beginning and end of the semester) and their responses towards questionnaire items were carefully analyzed. Comparing their answers between the pre and the post researches, there was a significant difference concerning how they minimize the learning anxiety and push themselves forward to be more successful learners;

**(Pre)** They have a zeal for improving their English ability, BUT they assume;

- \* More or less, Japanese are not good at learning English as non-natives,
- \* Learning English is rather painful and difficult, due to a lack of confidence,
- \* They can't even afford paying attention to the cross-cultural differences.

**(Post)** Learning English is NOT always difficult as;

- \* There are several ways to learn English via CD-ROMs or videos,
- \* They can do whatever they want, without overly depending on teacher's advice,
- \* Learning English is closely connected with some cultural aspects of English speaking countries, and it also reflects their indigenous culture.

The combination of Portfolio and CALL helps to promote learners' autonomy and positive awareness, by giving them a freer atmosphere and responsibility as well. This positive effect works a great deal on encouraging the learners to be more independent, and giving them satisfaction as they are highly expected to achieve their own goals.

Key words: autonomy, CALL, computer, modification, portfolio